

日韓共同理工系学部留学生対象予備教育の  
修了プレゼンテーションのための授業  
—2014年度、2015年度の「会話・プレゼン」クラスの授業を通して—

三谷 絵里

要 旨

筑波大学では日韓共同理工系学部留学生が修了プレゼンテーションを行う。2014年度はクラス間の連携やコースのスケジュール調整に難航し、発表が十分に行えないなどの問題が起きた。そのため2015年度は反省を踏まえて新たなスケジュールを作成し指導を行ったが課題も残った。本稿では2014年度、2015年度の「会話・プレゼン」クラス及び修了プレゼンテーションを振り返ることで、今後の改善について検討を行う。

【キーワード】 日韓予備教育 プレゼンテーション スケジュール調整

A Report on the Final Presentations by the Japan-Korea Program  
and Future Issues: through the attempt of “conversation and  
presentation” classes in academic  
years 2014 and 2015

MITANI Eri

**[Abstract]** The University of Tsukuba provides Japanese language preparatory education for foreign exchange students participating in the Japan-Korea Joint Science and Engineering Program. At the end of the course, students give a final presentation in Japanese about their area of specialization. Problems happened in the 2014 academic year, such as students not being able to present effectively, due to remaining issues of coordination between classes and schedule adjustment. Therefore, in the 2015 academic year, a new teaching schedule was created, based on reflection. This article clarifies the issues that occurred in the 2014 academic year, and reports on the actions taken in the 2015 academic year, and their results. We will examine future improvements by reviewing the “conversation and presentation” classes and final presentations of academic years 2014 and 2015.

**[Keywords]** Japan-Korea preparatory education Presentation Schedule adjustment

## 1. はじめに

日韓共同理工系学部留学生対象予備教育（以下、日韓プログラムと呼ぶ）は1998年の日韓首脳会談後、日韓共同宣言に基づいて2000年度からスタートした。このプログラムの学生は、韓国の慶熙大学で半年間の日本語クラスの予備教育を受講する。来日後は受け入れ先の各大学で半年間予備教育を受け、その後学部（筑波大学では学類）に入学する。

筑波大学では2000年度から日韓プログラムが始まり、2003年から日韓プログラムの一環として予備教育修了プレゼンテーション（以下、修了プレゼンテーションと呼ぶ）がスタートした。修了プレゼンテーションでは各学生が自分の研究テーマについてまとめ、各学類や同プログラム修了生、日本語クラスの教員などに日本語でプレゼンテーションを行う。

筑波大学では2015年度に7名の学生の受け入れを行った。彼らは日韓プログラムの16期生となる。

日韓プログラムにはいくつか日本語日本事情を学ぶコースがあるが、修了プレゼンテーションは主に「会話・プレゼン」クラスが中心となって指導にあたる。

筆者は2014年度、2015年度と日韓プログラムの「会話・プレゼン」クラスを担当し、修了プレゼンテーションに携わった。

本稿では「会話・プレゼン」クラスにおいて明らかになった2014年度の課題と、それを踏まえた2015年度の試みを報告し、今後の修了プレゼンテーションのさらなる改善の余地をさぐることを目的とする。

## 2. 授業について

### 2.1 授業スケジュール

筑波大学での日韓プログラムは、毎年専任教員がコーディネーターを交代して担当し、学生にあわせて半年間のスケジュールを組み、カリキュラムを編成して授業を行う。

学生達は、9月下旬に来日し、10月から2月まで日韓プログラムをはじめとする授業に参加する。各クラスは15回にわたって行われ、その中でも修了プレゼンテーションは、日韓プログラムの総まとめとして2月に行われる。授業概要は以下の通りである。

表 1 日韓プログラムの授業概要

科目の種類	科目内容
日本語日本事情科目	日韓日本語（週 4 コマ） 会話・プレゼン、作文、文法、漢字
	日本事情（週 1 コマ） 日本事情
	能力別技能別日本語補講（週 6 コマまで選択可） 文法・会話・聴解・読解・作文・漢字
専門科目	日韓理数系科目（週 2 コマ） 数学、オムニバス（物理学類、応用理工学類、工学システム学類、生物学類関係科目）
その他	ホームルーム（週 1 コマ） ホームルーム

2015 年度の受け入れ学生は 7 人、そのうち男子学生が 6 名、女子学生が 1 名であった。学生の所属予定学群は表 2 の通りである。

表 2 16 期生の所属予定学群

学群名	学類名	人数
理工学群	物理学類	1 名
	応用理工学類	2 名
	工学システム学類	2 名
	化学類	1 名
生命環境学群	生物学類	1 名

## 2.2 修了プレゼンテーションについて

修了プレゼンテーションとは 2003 年から開始された試みで、各自が自分の興味のある専門分野についてスクリプトを作成し、その内容を日本語で発表することを目的としたものである（許他 2004）。発表時間など多少の変化はあるものの 2015 年度まで続いており、今後も続く予想される。

修了プレゼンテーションは各学生が所属する予定の学類長や同プログラムの修了生、日本語クラスの教員など様々な所属・専門の聴衆を相手にプレゼンテーションを行う。そのため学生は短い時間で、専門外の人にも分かるように専門的な内容を発表することが求められる（高原他 2015）。

修了プレゼンテーションは日本語日本事情科目の中の「会話・プレゼン」クラスのまともとして行われるが、「作文」クラスなど、他の日韓プログラムのクラスも垣根を超えて協力し、学生達による日韓プログラムの集大成ともいえるイベントになりつつある。

留学生にとって日本語でプレゼンテーションを行うというだけでも難しいことである。そのうえ、まだ高校を卒業したばかりでプレゼンテーション自体がほぼ未経験の学生達が、自分の専門をテーマにプレゼンテーションを行うという非常に難易度が高い作業でもある。

しかし学生達は日本の大学に入学した後は日本人の学生とともに日本語で授業を受け、レポートを作成したり発表をし、論文を書く。さらに発表を行う際には質疑応答が行われ、聴衆と日本語でコミュニケーションを行う能力も必要となってくる。そのため修了プレゼンテーションは大学入学後の授業へとつながる、高度な専門性や大学生に必要な知識・マナーを身につけることをねらいとしている。

### 2.3 「会話・プレゼン」クラスの授業概要

「会話・プレゼン」クラスは修了プレゼンテーションやその後の大学生活を見据えて、発表のマナー、あいさつや質問、コメントの仕方などを身に着けることをねらいとしている。

15週ある授業のうち、前半7週と後半7週では異なる授業を行い、最後の15週目に修了プレゼンテーションを行う。

前半では専門や学類と関係のあるトピックについて各自調べて発表を行う。日本語で発表を行うクラスは日韓プログラム以外でも行われることもあるが、必ずしも専門について詳しく述べるようなトピックであるとは限らない。そこで前半では学生達が学類に入学後にも必要だと思われるさまざまな知識を増やすようなトピックを中心に発表を行う。

またレジュメやパワーポイントの書き方など基本的な知識の他に、発表時の挨拶の仕方、質疑応答の仕方、司会進行の仕方など発表時のマナーについての指導も行う。

コースの後半では修了プレゼンテーションに向けて各自の専門から一つ発表テーマを決め、発表練習やレジュメ、パワーポイントの作成を行い、毎週レジュメやパワーポイントを修正する作業を毎週行う。

コース最終日には前半と後半で得た知識やコミュニケーション能力を総合し、さまざまな所属・専門の聴衆にプレゼンテーションを行う。

表3 「会話・プレゼン」クラスの授業概要

週	授業内容
1～7週目	毎週異なるトピックについて発表 レジュメ・パワーポイントの作成、発表時のマナーについての指導
8～14週目	修了プレゼンテーションに向けての発表練習 レジュメ・パワーポイントの修正
15週目	修了プレゼンテーション

### 3. 2014年度の課題と2015年度の取り組み

修了プレゼンテーションは前述の通り「会話・プレゼン」クラスの最終発表として行われている。なお、2013年度より「作文」クラス、「日本事情」クラスとも連携をとり指導を行う試みが開始されている(高原他 2015)。

筆者が「会話・プレゼン」クラスの担当を始めた2014年度、2015年度も、2013年度の授業内容を踏襲し、主に「会話・プレゼン」クラスと「作文」クラスの担当教員が中心となって連携をとり、修了プレゼンテーションの準備を行った。

前半の7週間、学生達は「会話・プレゼン」クラスで毎週提示されたトピックについてプレゼンテーションを行うが、発表ではレジюме・パワーポイントに加え、発表原稿の作成が必要となる。そこで「作文」クラスで発表原稿の作成をし、作業を分担して行った。

後半の7週間は修了プレゼンテーションの準備にあて、引き続き「作文」クラスでは修了プレゼンテーションの発表原稿を、「会話・プレゼン」クラスではレジюмеとパワーポイントの作成を行った。また修了プレゼンテーションの直前には「会話・プレゼン」のクラスと「作文」クラスも合同で行い指導にあたるがあった。

2014年度では特に前半7週のスケジュールに大きな課題が残り、2015年度ではその反省を踏まえて改善を行った。以下にその詳細を記述する。

#### 3.1 2014年度の課題

まずここでは課題が残った2014年度の前半のスケジュール・クラス間の連携について述べる。

2014年度は「会話・プレゼン」クラスも「作文」クラスも木曜日に行われた。クラス開始当初の予定ではまず一週目に「作文」クラスでトピックの説明を行い、原稿を作成する。作成された原稿をもとに二週目に「会話・プレゼン」クラスでレジюмеを作成し、3週目に完成した原稿とレジюмеを用いて発表練習を行う予定であった。

表4 2014年度のトピック「私の学類紹介」の例(スケジュール変更前)

週数	曜日	会話・プレゼン (3限)	作文 (4限)
1	木	(他トピックの作業)	「私の学類紹介」説明・原稿作成
2	木	「私の学類紹介」 レジюмеの作成	「私の学類紹介」修正稿作成・提出
3	木	「私の学類紹介」発表	(他トピックの作業)

しかし表4のスケジュールだと、1週目の「作文」クラスから翌週までに原稿を作成・提出できない学生がいたり、原稿の修正がさらに必要だったり、担当教員側の原稿チェッ

クが間に合わなくなるなどの問題が起こり、レジユメの作成も行うことができないというような事態がしばしば発生した。

そこでコース途中でスケジュールを表5のスケジュールへと変更した。

表5 2014年度のトピック「私の学類紹介」の例（スケジュール変更後）

週数	曜日	会話・プレゼン（3限）	作文（4限）
1	木	（他トピックの作業） 「私の学類紹介」説明	「私の学類紹介」原稿作成
2	木	（他トピックの作業） 「私の学類紹介」レジユメ提出	「私の学類紹介」第一稿提出
振替休日のため休み			
3	木	「私の学類紹介」発表前半	「私の学類紹介」修正稿提出
4	木	「私の学類紹介」発表後半 （他トピックの作業）	（他トピックの作業）

まず「会話・プレゼン」クラスで先にトピックの説明を行い、構想メモを作成する。その後「作文」クラスで構想メモをもとに原稿を作成した。しかし提出された原稿では修正すべき点が多かったため、「修正稿提出日」を「作文クラス」の3週目に設けた。

また前述したように学生達はプレゼンテーションに不慣れな学生が多かったこともあり、予定していた発表時間を大幅にすぎる発表が多くみられたため、発表を2週に分けて行うよう変更した。

発表の順番は3週目の「会話・プレゼン」クラスの前に原稿が完成していた学生から行い、原稿が未完成の学生は翌週に発表を行うこととした。

このようにスケジュールはゆとりのあるものになり、丁寧なフィードバックを行うことができたが、発表練習は3つのトピックしか行うことができなかった。

### 3.2 2015年度のクラススケジュール

2014年度は発表練習が3つしか行えなかった反省をいかし、2015年度はなるべく多くの発表練習を行えるようにスケジュールを調整した。しかし2014年度とはいくつか異なる条件もあった。

2014年度と2015年度の大きな違いの一つに、各授業の曜日が挙げられる。2014年度は同一曜日に「作文」と「会話・プレゼン」があったため、表4、表5のようなスケジュールで行った。しかし2015年度は担当教員の出校日の都合上「会話・プレゼン」が火曜日、「作文」が金曜日と時間の空く授業日程だった。そのため原稿作成の翌週に発表練習を行うと、原稿が間に合わないことが予想されたため、同一テーマをさらに1週間ずらして行うこととした。

表6 2015年度トピック「専門分野で有名な人」の例

週数	曜日	プレゼンテーション	作文
1	火	(他トピックの発表) 「専門分野で有名な人」 構想メモ・レジュメ作成	授業なし
	金	授業なし	「専門分野で有名な人」 原稿作成
2	火	(他トピックの作業)	授業なし
	金	授業なし	「専門分野で有名な人」 修正稿作成
3	火	「専門分野で有名な人」発表 (他トピックの作業)	授業なし

表5を見てわかるように2014年度は「私の学類紹介」原稿の準備を、説明から発表まで4週にわたり行っている。それに対して2015年度では表6のように「専門分野で有名な人」は3週で発表を行った。

2014年度の前半では学生達が原稿を書くのに手間取り、原稿の提出が遅れ、原稿がないために発表練習が進まないという悪循環に陥った。そのため予定していた発表の半分ほどしか消化できなかった。

授業を連携して行うということは、連携がうまくいけば非常に効率的に進めることができるが、一つズレが生じるとその後のスケジュールにも影響が出てくるということである。そのためスケジュールの作成は慎重に行う必要があるだろう。

コース前半では日本語の発表に慣れるだけでなく、様々な専門の知識や情報を学ぶことをねらいとしている。2014年度は3つのトピックについてしか練習が行えず、発表に慣れる点からも、知識を増やす点からも課題が残るスケジュールとなった。

2015年度は教員の都合ではあったが授業間の日程が3～4日空いたことで結果的に余裕ができ、また練習トピックも7つと倍以上の練習をこなすことができた。また、「会話・プレゼン」クラスで構想をまとめてから「作文」クラスで原稿に臨めたのもスケジュールがうまくいった大きな要因の一つといえるだろう。

#### 4. 修了プレゼンテーション当日について

最終発表となる修了プレゼンテーションはもちろん教員の手伝いはあるが、基本的に全て学生達によって運営される。学生達が発表のために必要な役割は表6の通りである。

表 7 役割分担

準備	役割	人数
事前準備	司会	2人
	タイムキーパー	2人
	ポスター作製 レジュメとりまとめ	1人
	PPT とりまとめ	1人
	会場案内図の作製	1人
当日準備	会場設営	3人
	会場案内	4人

司会・タイムキーパー役は、自身の発表の時は行うことができないため、前半と後半に1人ずつで計2人必要であった。

司会は事前に「会話・プレゼン」クラスで司会進行の練習を行い、タイムキーパーは事務局に依頼し当日使用するベルを用意した。

ポスターは「日韓プログラム最終発表」としてセンター内に掲示するものである。それをさらに発表当日配布するレジュメ集の表紙とし、予想される聴衆の部数を印刷してまとめたものを作成した。印刷は、担当者一人で行ったわけではなく必要があれば手分けして行うこともあった。

パワーポイントのとりまとめは、使用するスライドをまとめてUSBメモリなどに保存し、当日パソコンでのチェックなどを行い支障なく操作できるようにしておく役割である。

その他当日の会場設営や案内は全員で手分けして行った。

学生の発表テーマは表8の通りである。

表 8 学生の発表テーマ一覧

学生	発表テーマ	専攻
学生 1	CPT 定理	物理学類
学生 2	ホログラムディスプレイ	応用理工学類
学生 3	自動車へのファブリックの適用	応用理工学類
学生 4	拡張現実とバーチャルリアリティー	工学システム学類
学生 5	ヒューマノイドの現在と未来	工学システム学類
学生 6	アロマオイル	化学類
学生 7	iPS 細胞とは何か	生物学類

#### 4.1 修了プレゼンテーションのまとめ

当日は各学類長や日韓プログラムの卒業生、日本語クラスの教員など多くの聴衆が参

加した。当初 30 人の聴衆を予定していたが、予想以上の聴衆の数にレジユメが足りなくなり、増刷を行うなど非常に盛況な発表会となった。

質疑応答もほとんどの学生は滞りなく行われ、下調べも十分であったことが伺える発表となった。学生達も日本語の発表を行い、質疑応答でも対応できたことで大きな自信につながったようである。

また学生達の発表マナーや司会進行は、当日聴講していた各学類の先生方からも非常に良い評価を得ることができ、専門性の面でも日本語コミュニケーション能力面でも修了プレゼンテーションの目的は達成されたといえるだろう。

しかし日本語力の不足している学生にとっては、質疑応答は難しいものだったようである。聴衆の中には学生の日本語のレベルなどがあまりわからない参加者もおり、難しい日本語や専門用語で質問してくる場合もあった。

発表はあらかじめ原稿を準備し、パワーポイントで内容をわかりやすく説明している。しかし質疑応答となるとある程度の予測はたてられても、日本語力あるいは専門知識の不足により満足な回答ができない場面もあった。

授業内での発表練習では難しい質問が来た場合の回答の仕方なども練習したが、授業内の質問者は同プログラムの学生や、日本語レベルを理解している教員だけであった。そのため深いところまで掘り下げた質問や、難しい日本語での質問はあまり行うことがなく、想定外の事態となった。

ある学生は難しい日本語の質問にパニックになり、言葉に詰まってしまう場面があった。その場合は筆者が助け舟を出し、簡単な日本語で再度質問することで無事に質疑応答を終了することができた。

今後は発表練習だけでなく、質疑応答練習も専門性の高い第三者にみてもらう、あるいは専門の発表を見学に行くなど対策を行う必要があるだろう。

## 5. 「会話・プレゼン」クラスにおける問題点とその対応

ここでは 2014 年度、2015 年度を通して明らかになった問題とその対応について記述する。

### 5.1 レジユメ・パワーポイントについて

日韓プログラムの学生達はレジユメというものを制作したことがない学生が多く、2015 年度もほぼ全員がレジユメを書いたことがなかった。そのため授業当初、レジユメというよりもメモのようなものを提出する学生が大半だった。

さらに、学生達はインターネット上にある出典が定かではないサイトなどからも引用することが多かった。学生達には親しみがあり見慣れたページかもしれないが、学術発

表などの場では参考文献などを表記する際は気を付けるように指導する必要がある。

また、こちらでレジユメの様式を事前に説明してその通りに書いてくるように告げても、自由なスタイルのレジユメを書いてくる学生もおり、根気強い指導が求められた。しかし指導を重ねるごとに書き方がわかってきたようで、最終的には書式の整ったレジユメを作成できるようになった。

学生の中にはレジユメやパワーポイントを作成し、教師のOKが出ていないのに自分で完成と決めつけてしまうこともあった。しかし学生達はお互いに発表をし合うことで、自分の発表で伝わりにくい部分や未完成な部分に気付いたようである。

## 5.2 発表練習の難しさ

修了プレゼンテーションは発表10分質問5分で行う。しかしはじめは10分の発表がなかなか難しく、用意した原稿を読み上げても10分より短くなってしまったり、逆にテーマが定まらないまま話し続けたりと、20分近い発表になってしまうこともあった。そのため何度も練習を繰り返しレジユメやパワーポイントの修正を行った。

修了プレゼンテーションの練習の後半になると、パワーポイントやレジユメが完成に近づいてくる。練習では実際にレジユメやパワーポイントを使用して練習することで、レジユメやパワーポイントにおける情報の取捨選択を行う必要も理解したようだった。

また発表練習を行ってみると考えていた内容がうまく伝えられない、あるいは自分の発表したい内容とは違うと感じた学生もおり、途中でテーマを変える学生もいた。その場合には授業の際に発表練習を行うグループと、個別にレジユメやパワーポイント、原稿の修正などを行うグループに分け個別に対応した。

修了プレゼンテーションに向けての練習ではコース当初から「各自のテーマを決めて下調べをするように」と授業で再三指導を行ってきた。しかし学生達は日韓の授業以外にも日本語クラスなどがあり、思うように準備をできていないように見受けられる学生も少なくなかった。コース後半に入り最終発表の準備を始めてからおよそ1か月半で修了プレゼンテーション当日となるが、いざ最終発表の準備を始めてみると期間の短さに危機感を覚える学生もいたようである。

学生達は修了プレゼンテーションを普段「会話・プレゼン」のクラスで行っている授業の延長だと考えているところがあり、いつもクラスで行っている授業を先輩や先生が何人か見に来る程度のものだと考えていたようである。しかし当日使用する教室を確認すると予想外の教室の大きさに驚いていた。そのため発表日が近づいてくるにつれ焦りが見られ、発表直前の週には他の日韓プログラムのクラスでも何度もビデオ撮影をしてリハーサルを行い、自分の動画を見て確認するという作業を行った。

また授業時間外にも練習を行いたい学生がいる場合、教員が教室を確保して手伝うと

言うと予定のある学生以外は全員参加して必死に練習していた。これには「会話・プレゼン」クラスを担当している筆者だけではなく、日韓プログラムに携わっている他のクラスの教員も協力して取り組んだ。

### 5.3 日本語力が不足している学生

日韓プログラムの学生の中でも日本語力が不足している学生は語彙力や聴解力が足りず、しばしばこちらの指示も理解できていないように見受けられる時があった。そのうえ、日本語力が不足しているため、原稿やレジュメを書き上げるのにも時間がかかり、さらにネイティブチェックなどにも時間がかかる。

また語彙力の不足からか、発表に対する質問も理解できない場面があった。せっかく発表原稿を用意しても、時間内に読み終わることができず、自分で書いた原稿にもかかわらず漢字が読めない、あるいは正しく単語を発音できず、聞き手に言葉が伝わらないなど苦労している様子が伺えた。

このような学生には、授業外に時間を測りながら原稿を毎日読み上げる練習をすること、それを友達や誰かに聞いてもらうよう指導を行った。真面目に取り組んでいたようで、結果として本番でも良いパフォーマンスを行うことができた。

### 5.4 日本語教師の専門知識の不足

修了プレゼンテーションでは各学生の専門について発表を行うが、発表指導を行う教師は日本語教師であり、専門知識が十分でない場合もある。また、日常生活の日本語では使用しない専門用語も多く、学生が専門用語としてその日本語を使用しているのか、あるいはただの誤用なのかを確かめることに非常に多くの時間を費やした。

一例を挙げると、学生が「～整理」と話していた専門用語がある。修了プレゼンテーションの発表日直前に、韓国語がわかる教師の指摘により「～整理」ではなく「～定理」であることが判明した。韓国語では「整理」も「定理」も同じ言葉を使用するために起きた間違いであるが、専門用語の確認には慎重にならなければならない。

学生の専門は多岐にわたるため、教師側の知識のみでの判断は難しい場合がある。2015年度は専門チューターや、日韓プログラムの修了生たちと連絡をとり、授業外でも日本語や専門の指導を受けることを推奨した。

日韓プログラムの修了生達は非常に協力的であり、発表へのアドバイスから日常生活での補助など、学生たちと友好的に付き合っているようである。

ただ中には自分と同じ専門や発表テーマの修了生がいるとは限らず、苦労しているケースもあったようである。そのような学生は日本人韓国人に関わらず所属予定の学類の先輩などに話を聞き、アドバイスを仰いでいた。

また2015年度の新たな試みとして専門チューターの活用が挙げられる。筑波大学では、入学当初の留学生が日常生活や研究活動などを支障なく行えるように学生が個別の支援を行うチューター制度がある。研究室や専門に近い学生がチューターとなる場合が多く、2015年度はチューターの助けを借りることで問題のある学生が改善したケースがみられた。

具体的には、宿題の提出率が悪い学生がおり、日韓プログラムのコーディネーターと相談して専門チューターに連絡をとった。専門チューターは学生の宿題を見たり、学生の様子をメールで教師に報告したことで、学生の宿題の提出や宿題の精度もあがった。

## 6. 今後の課題とまとめ

ここまで2014年度における課題と2015年度に行われた「会話・プレゼン」クラス及び修了プレゼンテーションを見てきた。

2014年度におけるスケジュールの課題は2015年度ではうまく解消することができ、結果として修了プレゼンテーションの目的である大学入学後の授業へとつながる高度な専門性や大学生に必要な知識・マナーを身につけることなどは達成できたといえよう。

しかし発表における質疑応答はまだ改善の余地がある。授業内で専門の聴衆に参加をして質疑応答を行う、あるいは実際の専門の質疑応答を見学するなど対策を行うことができると思われる。

また日本語教師だけでは専門の知識や韓国語のチェックが難しい場合もみられるため、日韓プログラムの教員及び修了生や専門チューターなども活用していく必要があるだろう。

日韓プログラムの学生達にとって、大学入学前に専門に関するプレゼンテーションを行うことは、自分の将来をよりしっかりと見据え、専門を高めていく一つのきっかけになるのではないだろうか。

2年を通じた活動を見ていくなかで、これからの修了プレゼンテーションをさらに良いものとするための課題がいくつか提示された。これらの課題をクリアしていくことで、今後の修了プレゼンテーションはよりよいものとなっていくであろう。

## 参考文献

- 許明子・西村よしみ・小林典子・酒井たか子(2004)「筑波大学日韓共同理工系学部留学生事業報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』19号：73-78
- 高原真理・石上綾子・鄭聖美(2015)「クラス間連携によるプレゼンテーション指導の試みー2013年度日韓共同理工系学部留学生向け予備教育での取り組みー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』30号：309-328